

ケイ・カウフマン・シレメイ著
柘植元一訳

エチオピア音楽民族誌 —ファラシヤ／エチオピア正 教／望郷歌—



アルク出版
2009年 248ページ
2300円＋税

本書は、1973年半ばから2年半、エチオピアで調査、研究を続けた女性の音楽民族学者、ケイ・カウフマン・シレメイ氏の個人的な体験の回想録である。著者の研究内容よりも、研究のかたわらで起こっていた著者自身の生活やエチオピアの政治の変化に関する記述に多くのページを割いており、「エチオピア音楽民族誌」という邦題から内容を想像して読み始めた読者はとまどいをおぼえるだろう。しかし本書は、感傷的な語りではなく、出会った人や遭遇した出来事に関する丁寧な記述により、当時のエチオピア社会の様子をいきいきと描きだす。その点で、本書はある種の「民族誌」としての価値をもっている。

ここでは、ユダヤ的要素、フェミニスト、音楽民族学者という著者のアイデンティティ(20～21ページ)を手がかりに本書の紹介をはじめたい。著者は、アメリカのユダヤ人コミュニティと深いかかわりをもって育った。このことは、彼女がファラシヤと呼ばれるエチオピア北部に住むユダヤ教的な宗教実践をする人びとの音楽に興味をもつ原因となった。また、アデン出身のセファルド系ユダヤ人社会とも交流を深め、ユダヤ教やユダヤ人からエチオピアを捉える記述が目立つ。研究者を志す著者は、女性として型破りな生き方をしていることを意識しながら、女性であることが引き起こす調査中の問題や周囲のネガティブな反応に、落ち着いて対応していく。現地では会う女性たちの出自、社会関係などに関するこまやかな記述は、エチオピアの女性に対する著者の誠実な姿勢をうかがわがらせている。音楽民族学者として著者は、ファラシヤの住む村落に入り、後に重大な「発見」をする。その「発見」の過程も興味深い(後述)が、音楽の研究者ならではのとも言えるような、ラジオやテレビ放送を含む音や声に注目して、エチオピアの社会状況を捉える場面もまた、印象的である。

しかし、この「民族誌」の中で強く心に残るのは、著者の結婚とエチオピアで起きた革命により、彼女のアイデンティティに関わって次々に生じた困難が語られるところであろう。1973年半ば、著者はエチオピアで調査を始め、間もなくアジスアベバ在住でアデン出身のユダヤ人シレメイ家の実業家と恋に落ちて結婚する。同じ頃エチオピアでは、革命によって皇帝が退位

し、社会主義国家が誕生した。当時著者は、ユダヤ人シレメイ家の男性との結婚により、一家の嫁として期待されることと自分の意志の間で揺れ動くだけでなく、夫の経営する建物が国有化されるなど、生活上も不安定な状況に直面する。これに加えて、著者は村での調査を再開することも難しくなり、アジスアベバでエチオピア正教の典礼音楽の調査に着手する。だが、イスラエルとエチオピアの関係が悪化し、さらに旧政権を下支えしていたエチオピア正教の排除をもくろむ新政権下では、シレメイ家の一員となった著者がエチオピア正教に出入りすることは困難を極めた。それでも調査を続行することにより、彼女はファラシヤの典礼音楽が、エチオピア正教の典礼の影響を強く受けていることを「発見」してしまう。だが、ファラシヤがユダヤ人とは断定できないという著者の研究結果は、ファラシヤをイスラエルへ連れ出すことに必死になっている活動家たちが受け入れられることではなく、反感を買うことになった。

政治の動きや結婚によって生活状況が変化する中で研究を続け、困難に直面しながらも、それらに向き合う著者の姿はさすがに美しい。筆者が本書で目をひいたのは、著者の結婚により関わりをもった上級の外国人コミュニティでの暮らしや人間関係のつながりに関する詳述である。筆者は、ウガンダの首都でおこなわれている音楽パフォーマンスとその担い手である若者を対象として調査をおこなっているが、パフォーマンスだけを追いかけることが多い。研究対象だけでなく会う人びとすべてに興味をもつ彼女の姿勢は、数々の困難を乗り越えることができた要因のひとつだと確信する。彼女は、どんな場面でも決して自暴自棄になることなく相手を見据えることをやめなかった。これは研究姿勢としてはもちろん、人生を切り抜けるための重要な鍵といえよう。

本書は、革命当時のことを知る資料、音楽民族学的な調査に取り組む人のための入門書としてだけでなく、一筋縄ではいかない人生という長期調査の旅をうまくすすめる手がかりがみつまっている「民族誌」として読まれるべきであろう。

(大門碧／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)